

明治 建築仕様書 救貧行政  
 西洋家作雛形 Cottage Building 銀座大火

正会員 ○ 丸茂友里\*1  
 同 中谷礼仁\*2  
 同 本橋仁\*3  
 同 根来美和\*4  
 同 廣瀬翔太郎\*5

### 1. 研究の目的

本稿は、明治初期において、西洋から建築「技術」「思想」が、どのような受容の過程、さらには変質を経て日本に紹介がされたのかについて、述べるものである。その分析の対象とするのは、『西洋家作雛形』である。『西洋家作雛形』（訳者：村田文夫/山田貢一郎 出版年：1870）は、日本における最初期の建築技術書<sup>1</sup>とされ、同時代に英国において発刊された『Cottage Building』（表題：Cottage Building (6th ed.) 副題：Hints For Improved Dwellings For The Labouring Classes 著者：C.Bruce Allen 出版社/出版年：London: Strahan & Co., 1870）を底本としている。

### 前稿までのまとめ

『西洋家作雛形』『Cottage Building』については、前稿までにおいて、以下のことを報告した。

- 『西洋家作雛形』では、『Cottage Building』が執筆されるに至る背景にとされる、当時の英国の労働者がおかれていた社会的状況の説明が大きく省かれている。
- 『Cottage Building』の著者である C・Bruce・Allen は、同書の中で単なる建設に関する技術的な説明のみならず、労働者の生活改善を目的とした「経済性」「住環境」を重視した具体的な提案を行っている。
- 『西洋家作雛形』の訳者である村田文夫・山田貢一郎は、当時の日本において類例のない部材や構法などに関する説明については、「読みのかたかな表記」「訳者自身による補足説明」等の工夫を加えている。

### 2. 他の明治期公刊建築書との関係

前述のとおり、現在確認できる明治期公刊建築書の中で、「西洋建築」を取り上げたものは、『西洋家作雛形』が最も、つづく書物が現れるまでに10年の開きがある。その後の建築書には、相互に引用等の関係性がみられるが、本書はあくまでも独立し、類書はみられない。<sup>1</sup>

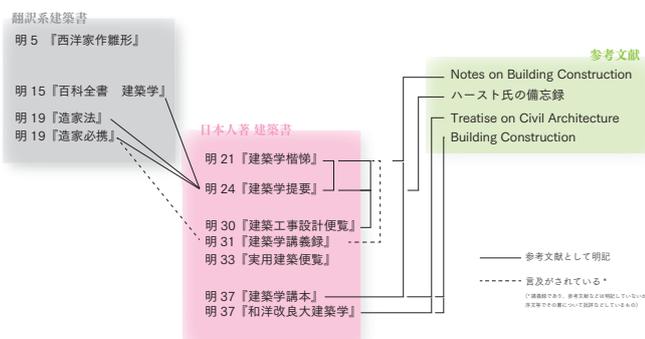


Fig1. 明治期の公刊建築書にみられる相互関係（筆者作成）

### 3. 「建築」概念における美学的観点の不在

前述のとおり、『西洋家作雛形』において、翻訳箇所は取捨選択され、また選択された箇所についても読者理解への

発行(明治)	書名	著者	発行地	発行者
3	造営法	陸軍学兵寮		陸軍学兵寮
5	西洋家作ひながた	シー・プリウス・アルレン 著 ウキール・ジョン 増補 村田文夫・山田貢一郎 訳	東京	玉山堂
15	建築学『百科全書』	W.&R.Chambers著 文部省 訳	東京	文部省
15	工匠用字類	宮地高里 著	東京	金港堂
19	造家法	チャンパー 著 都築直吉 訳	東京	丸善
19	工匠必携	柴田四子吉 著	京都	柴田吉次郎 山内正次郎
19	造家必携	ジョサイア・コンドル 述 松田周次・曾禰達蔵 記	東京	加藤良吉
21	新選作事用文	剣持柳太郎 編	東京	古文堂
21-23	建築学楷梯	中村達太郎 編	東京	米倉屋書店
23	欧米建築	下田菊太郎 著	東京	下田菊太郎
24	建築学提要	千葉末吉 著	広島	淵点堂
25	地震家屋	佐藤勇造 著	東京	共益商社
26	小学校建築図案	文部省	[東京]	文部省
27	積壁法 一名・五効建築説明	市村善吉 著	大阪	市村善吉
27	洋館建築設計書々式	立川知方 編	東京	開工社
27	壁職業祖先記録	小松雪山 著	東京	尚古堂
28	大工職工作文字必要便	湯本栄助 著	東京	栄盛堂
28	木造耐震家屋構造要領等調査ノ主旨	文部省震災予防調査会	[東京]	文部省震災予防調査会
30	建築学提要	千葉温也 編	東京	建築書院
30	建築造営心得書 附・伊藤建築事務所定則	伊藤為吉 著	東京	伊藤建築設計事務所
30	建築工事設計便覧	大泉竜之助 編	東京	建築書院
30	建築設計通書	朝倉清一 編	東京	共益商社
32	建築設計便覧:建築工事	滝大吉 著、野村一郎 校閲、大泉龍之輔 編	東京	建築書院
31-42	建築学講義録	滝大吉 述	東京	建築書院
32	家屋改良談	土屋元作 著	東京	時事新報社
33	実用建築便覧	竹貫直次 著	東京	博文館
35	建築必携	Hurst, John Thomas 著 今井殿三郎 訳	東京	建築書院
36	通俗家屋改良建築法	井上繁次郎 著	東京	博文館
37-38	建築学講本 第1,2,4-6冊	建築学研究会 編	東京	建築学研究会
37-44	和洋改良大建築学	三橋四郎 著	東京	大倉書店
38	建築工事仕様便覧	小国巳一 編	東京	建築書院
38,41	和洋建築工事仕様設計実例	田中豊太郎 編	東京	建築書院
39	学校建築通解	島田博 著	新潟	末広堂
39	簡易洋風建築術	森友吉 著	東京	信友堂
39,40	和洋住宅建築学	駒杵勤治 著	東京	須原屋

Fig2. 明治期の主な公刊建築書一覧（筆者作成）

正確な理解のための説明が加えられていることを述べた。一方で、翻訳されたにも関わらず、アレンの意図と異なる翻訳がなされている箇所がある。それは、「ピクチャレスク (picturesque)」の概念について述べた箇所に見られた。

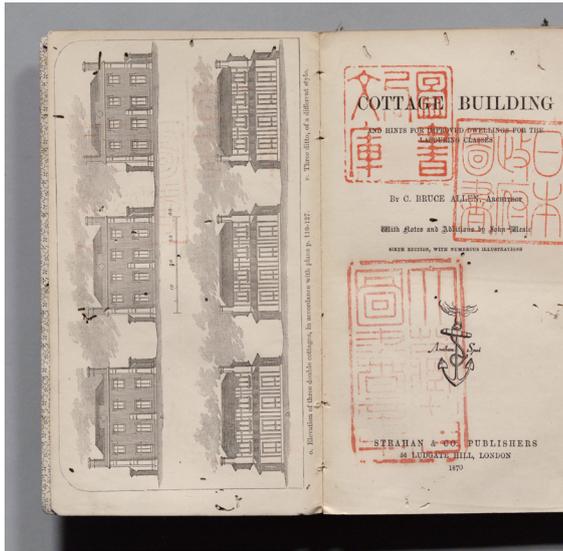


Fig3. 『Cottage Building』中扉前に挿入されている図版  
図版下部に以下の一文が書かれている「Elevation of three double cottage, in accordance with plans p.110-127. Three ditto, of a different style.」

### Cottage Building (p.110-127)

In the Cottages that have been designed of a humble kind, an apparent similitude of elevation exists in almost all of them.

In the present instance, I have, without losing sight of the nature of our scenery and climate, made such exterior and inexpensive decorations as will, it is presumed, be received as agreeable and picturesque to the taste.

### Elevation of three double cottage

上図は、『Cottage Building』の中扉前に掲載されている図版である。上記の通り、「ピクチャレスク」という概念のもと、それを比較・検討するために同じ立面を三件並べる図版が内扉の前に挿入されている。しかし、『西洋家作雛形』においてはその並びが崩され比較の意味は後退し単なる並列的な事例紹介となっている。

### 西洋的「建築」概念の不在

上記のような改変により、本書において重要視される、景観的な問題意識が、訳書においては失われている。この図版の改変が端的に示すように、西洋建築における美学的な観点が、「翻訳」がなされていない。村田・山田は、内容を理解した上で、正確な翻訳をおこなってきたことは前述したとおりである。こうした背景の原因に、当時の日本と西洋における建築概念の不一致を挙げたい。

日本において、美学的な側面を含んだ「建築」概念が一般化されるのは、明治27年の伊東忠太(1867-1904)による「アーキテクチュールの本義を論じて其の訳字を撰定し我が造家学会の改名を望む」<sup>2</sup>とされる。本書が出版された明治初期においては、建築に含まれる工学・美学の概念が未分化な状態にあった。こうした背景により、ピクチャレスクという美学的観点が、置き去りにされ翻訳の変質を引き起こしているといえる。

\*1 早稲田大学 修士 (工学)

\*2 早稲田大学理工学術院 教授 博士 (工学)

\*3 早稲田大学理工学術院 助手

\*4 早稲田大学 修士 (工学)

\*5 早稲田大学 学士 (工学)

三軒の並びが崩され、本来の意味を成していない。

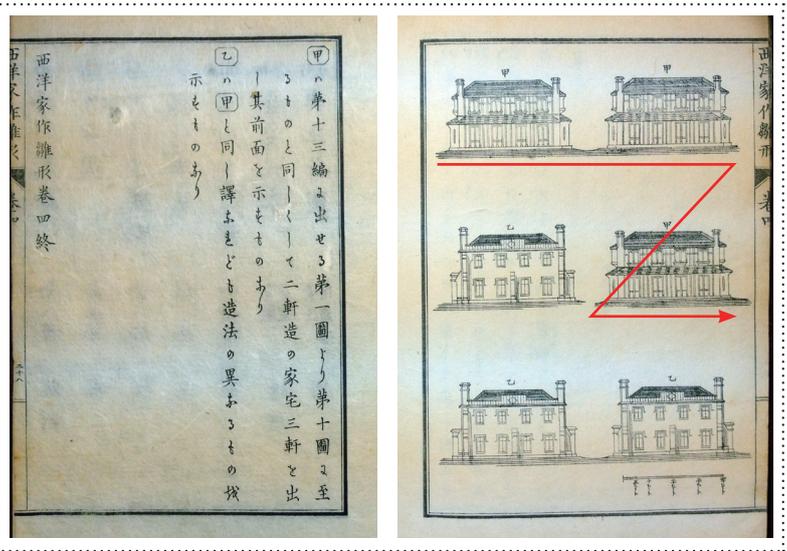


Fig4. 『西洋家作雛形』左 二十八丁表 右 二十七丁裏

### 西洋家作雛形 (巻之四 二十八丁表)

凡て賤民の為ル設け多る小宅の雛形の前面ハ其見る所殆んど皆相同しきものナリ

今我ら作り多流小宅の雛形ハ天然の景色を失王須 氣候の為ル損春ることなく且風韻なりて甚多愛玩春べく畫けふ可 如くして入費少奈き外面の飾作を設け多り

### 5. 結論

『西洋家作雛形』『Cottage Building』の比較を通して、執筆の背景とともに、明治初期における本書の役割について再考を行なった。また、意図的な訳出方法の特徴を分析した。その結果、翻訳過程において、美学論に関する大部分が削除されていることが判明した。この削除行為については、前稿で紹介した翻訳箇所の緻密さを見る限り、無意識的とは言い切れない、意識的側面を有しているとも考えられる。つまり当時の日本において理解困難な「美」の問題と意図的に等閑しようとした可能性も否定出来ないのである。

西洋建築が移入される過程において現出した、これら事象が示すものは、「建築」の概念が現代的意味を獲得するに至る、その変遷過程の初期段階として位置づけられる。

註釈 1. 佐藤功一「西洋家作雛形解題」, 吉野作造編『明治文化全集 第24巻, 科学編』(日本評論社, 1930, pp.7-14) 2. Fig1は、主な関係図を示すため、他にも多くの書物を参考にしてしている書(「和洋改良大建築学」など)もあるが、ここでは「西洋建築雛形」に焦点を絞るよう割愛した。 3. 伊東忠太「アーキテクチュールの本義を論じて其譯字を撰定し我が造家學會の改名を望む」(建築雑誌. 8巻. 90号. pp.195-197)

\*1 Waseda Univ., M. Eng.

\*2 Prof, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.

\*3 Research Assoc, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ.

\*4 Waseda Univ., M. Eng.

\*5 Waseda Univ.